

I 国語問題

注意

- 一 試験開始の指示があるまでこの問題冊子を開いてはいけません。
- 二 解答用紙はすべてHBの黒鉛筆またはHBの黒のシャープペンシルで記入することになっています。HBの黒鉛筆・消しゴムを忘れた人は監督に申し出てください。
(万年筆・ボールペン・サインペンなどを使用してはいけません。)
- 三 この問題冊子は16ページまでとなっています。試験開始後、ただちにページ数を確認してください。なお、問題番号は1〜3となっています。
- 四 解答用紙にはすでに受験番号が記入されていますので、出席票の受験番号が、あなたの受験票の番号であるかどうかを確認し、出席票の氏名欄に氏名のみを記入してください。なお、出席票は切り離さないでください。
- 五 解答は解答用紙の指定された解答欄に記入し、その他の部分には何も書いてはいけません。
- 六 解答用紙を折り曲げたり、破ったり、傷つけたりしないように注意してください。
- 七 この問題冊子は持ち帰ってください。

マーク・センス法についての注意

マーク・センス法とは、鉛筆でマークした部分を機械が直接よみとって採点する方法です。

- 一 マークは、左記の記入例のようにHBの黒鉛筆で枠の中をぬり残さず濃くぬりつぶしてください。
- 二 一つのマーク欄には一つしかマークしてはいけません。
- 三 訂正する場合は消しゴムでよく消し、消しきらずはきれいに取り除いてください。

マーク例

①
1 2 3 4 5
0 0 ● 0 0

(3と解答する場合)

一 左の文章を読んで後の設問に答えよ。(解答はすべて解答用紙に書くこと)

(1) 私は十くらい時から、家に猫のいたことをおぼえています。その猫が私の親しくした初めての猫で名を玉といい、女でした。白の多い三毛で、おそらく私の八つか九つくらいから家にいたように思います。それを貰って初めて「猫」を持った時の感じも異様に思いますが、臆ろです。何しろ九年間いっしょに居て私とは特別親密にしました。が、私が中学を卒業する頃から、彼女はいつとなく健康な日が少なくなり、まもなく死んだ。死んだ時には、私は家にいず、画かきに独立して小石川の方に離れていました(注2)が、玉は家の向こう側の煙草屋の屋根で死んでいたそうです。もしかすると頼りに思う私がいなくなったので力落ちして、死んだのではないかと今も思う。私はその頃絵の仕事を思う一念に多忙で、つい玉のことは家を出てからは忘れる時も多かったが——しかし外で猫を見るときまって玉は如何(どう)しているだろうとは断えず思った、——或る日家へ行って玉の死のことを突然聞き、全くバンカンのこみ上げる気がしました。(2)一つの自分の過去の一片——又は記念——が、死んだような気がした。この間までいたのにもう死んでしまったのか。私の小学中学ともずっと親しくいっしょに過ごしたのにもういないのか。全く、互いに一つしかない一生の気がします。同時に一人しかない友の感です。玉は私の「少年」を誰よりもよく知っている一つの生(いのち)です。僕の手へは、彼女はそこが巢(ね)のようにきつと来たのだ。九年間断えず。私は子供の時玉がいないとねられなかった。今でも私は彼女の整った顔もおぼえているし、声もおぼえている。只形だけその後の猫と記憶が交ってはつきりしませんが、彼女の存在は只いつも私の記憶に鮮やかです。

私は玉にすまないことがある。——その時の彼女のつれなさ(3)のような孤独な影を思いますが、彼女が綺麗な三毛の子を生んだことがあります。その頃すでに病身の初めでしたが、私はその子と玉といっしょに育てているうち全く子の方が親の玉より好きになって、玉が少しうるさくなつた。子を私が抱いていると膝の上へ又玉がわり込んで子を下にして、子はキュウクツ(4)なので這い出してしまふ。私は心からこの子の方が貴様より好きだ。と玉

に対して思ったことがあります。如何にしたわけか、その時玉が悄然と私の膝を下りて、蔵の戸前の黒塗りの上に立ち、寂し気にあらぬ方を見て、それから外へ出て行った。

私の膝へは、代わりに子猫が乗って来た。しかし私は何だか気をつけて、さすがあの玉とは全く僕がこの子猫くらい頃から仲よくしている、この子猫はまあ可愛らしく面白いがしかし浅い。とはつきり思い、それ以来、玉がうるさいと思えなくなった。——あの時玉は寂しがったかと思う。私が追ひ払いもどうもせず、只イヤだと胸に思っただけでフイと出て行ったのが気にかかる。

が、何と私をたよりにしていたでしょう。私は時々玉を忘れたが、玉は始終私を忘れなかつたかに思います。夜中に暗中を手さぐりして便所へ行ったことがありましたが、神棚の下のとこでやにわに上から肩へ玉に乗られてひやっとしたことがある。思わず立ちすくんだが、その時玉はもう身をすりよせて肩のせまいところであつちこつち廻り、頬ずりをするし、ゴロゴロいつている。私は飯をこしらえて、それを食わせてから抱いてねた。玉はあの時うれしいと思つたか。

私は玉から悪意を感じたことをまるで思い出せない。彼女に対しては私が思い足りなかつた悔いばかりです。殊に晩年に別れていたせいからそう思うのでしょうか。彼女は煙草屋の屋根で死んでいた。⁽⁴⁾その時私はたしかに毛程も彼女のこととは思わなかつた間に、二人の間に、九年経つたのだ。私は子供ではなく、その時青年で画かきになりかけていた。大人になるにつれて彼女には無情になつたでしょう。⁽⁵⁾本意ない気がします。こつちは有意識、向こうは無意識なだけに。

彼女は沢山に子を産んだ。そのたびにみんな鯉節一本ずつつけてお嫁やおむこさんにやりました。いつも私が仲人だつた。玉はそれには知らん顔をしていた。子供がいなくなつて変な声で夜泣いても、私が「玉、玉」と呼ぶとやつて来てゴロゴロいつて安眠しました。

私は画かきに独立して小さい家を借り、二年ばかりすぎた。この二年と、記憶せぬ子供の頃の或る年月とが私の猫と離れて住んだ時間です。で、異例です。恐らく今後へもそうかもしれませぬ。私は猫が好きです。⁽⁶⁾私の生

活それ自身それを好むように好きなのです。猫がないと一種物足りない。夜おそく起きていると家中で猫だけ御相伴に起きていて、向こうもこっちの起きていることに一種の喜びを感じている——にちがいない。そういう時には、その他の時には一度もいたことのない私の机の一隅にいる。彼女も寂しいのできつと一つところにいるのです。私は彼女がいるので仕事が捗る。^(注3) イプセンはサソリを机の一端へおいて、彼が林檎へ毒を注す様を見ながら仕事をすることを好いたと聞きましたが、「好いた」という共通から私は机の上に猫にいて貰うことを好みます。彼女の夜の満々とした巴のような眼を見ると、何か気がすんで無心になり、疲れていても元氣を取り戻す。で、二十の頃私は独立して赤坂^(注4)一ツ木に猫と離れて生活しましたが、或る日その借家の裏手を散歩するとはか
らず石段の上に、捨てられた小さな黒猫とブチ猫を見た。私はそのまま素通りするに堪えませんでした。しかしブチ猫はひどい眼^(注6)くさりで汚く、氣の毒だとは思ったが、強いて連れ帰る程又氣の毒にも思えなかつたし、それに友達もいっしょで「ヨセ、ヨセ」と言う。私が捨猫に近づくとさえずりにヨセと言う。それを一種口実に感じて、全くブチには氣の毒だったが黒だけ拾って帰って来ました。

彼にはビイと名をつけました。私はその頃雑誌生活をやり生活社にいたので、^(注7) LA VIE のビイです。初めは女かと思つたが、段々時が経つと男と知れた。胸の一寸白いほかほか全く黒のクラス猫でした。剽悍な顔をして見る々々優勢に大きくなり、ステッキのように尾を振り立ててのさばり歩く。面白い。私はすっかり彼が氣に入つた。

時々しかし丈夫な元氣なビイを見るにつけてその兄弟(?)のブチの成行を考えたが、多分誰かに拾われたでしょう。ビイを拾った翌日又散歩に行つて見たが見えなかつたし、——しかし、この事は間もなく忘れられました。今久しぶりで珍しく思い出した程度に。

やはり「猫」を一体に好きは好きなのだが殊に「自分の猫」が段ちがい好きなのです。どうも自然です。そこにはいっつか生活的に記憶や背景がつき、離れられなくなる。……

で、黒猫のビイは生長した。大きく、ノンキ坊主に面白く育つた。⁽⁷⁾が結局彼とはそれだけのことで別れました。

彼は元気で快活で(注8)トンキョで、「おもちゃ猫」にはよかったが、一体牡猫は情がなくくどくエゴイストすぎ「動物」すぎます。

(木村莊八「思い出」大正九年、による)

(注) 1 中学——旧制中学(今の高校に相当)のこと。五年制が一般的。

2 小石川——東京都文京区の地名。

3 イブセン——ノルウェーの劇作家(一八二八—一九〇六)。

4 赤坂一ツ木——東京都港区の地名。

5 ブチ猫——地色と異なった色がまだらに入っている毛並みの猫。

6 眼くさり——眼病で眼のふちがただれた状態。

7 LA VIE——フランス語で、生活、一生、生命といったような意味。

8 トンキョ——「頓狂」のこと。

問

(A) 線部(イ・ロ)を漢字に改めよ。(ただし、楷書かいしよで記すこと)

(B) 線部(1)について。ここでは「十くらい」といい、あとのほうでは「八つか九つくらい」と言っているが、この食い違いの説明として、左記各項のうち、ふさわしいものを1、ふさわしくないものを2として、それぞれ番号で答えよ。

イ いったん大雑把に「十くらい」と言ったものの、あとで、より正確な数字に修正した。

ロ 単に、数え年と満年齢という数え方の違いによって生じた差に過ぎない。

ハ おぼえているのは「十くらい」の時だが、それ以前からいたので「八つか九つくらい」となった。

ニ 猫が初めて家に来た時の記憶ははっきりせず、逆に「十くらい」からの記憶ははっきりしている。
ホ もらった時の感じだけは鮮明だが、いたことをおぼえているとなると「十くらい」からだから。

(C) ——— 線部(2)の説明として、左記各項の中から最も適当なもの一つを選び、番号で答えよ。

- 1 玉の死によって、自分の過去が否定されたような気がした。
- 2 玉と自分の過去とは、たとえば言えば二人三脚の関係のようなものであった。
- 3 玉と私とは、どちらか一方が欠けては存在できないほどの関係だった。
- 4 玉の死は、玉と共にあった私の「少年」の死を意味した。
- 5 玉の死は無二の親友の死であり、互いの一生は一つしかなかった。

(D) ——— 線部(3)の意味として、左記各項の中から最も適当なもの一つを選び、番号で答えよ。

- 1 思いやりがない
- 2 薄情である
- 3 そしらぬふりをする
- 4 思うにまかせない
- 5 何の変化もない

(E) ——— 線部(4)について。「毛程も彼女のこととは思わなかった」理由として、左記各項のうち、ふさわしいものを1、ふさわしくないものを2として、それぞれ番号で答えよ。

イ 絵の仕事にかまけていたから。

ロ 家を出て、しばらく別れていたから。

ハ 私の思いが浅かったから。

ニ 私の方はたよりにしていなかったから。

ホ 私の気持ちは親猫よりも子猫の方にあったから。

(F) ——— 線部(5)の意味として、左記各項の中から最も適当なもの一つを選び、番号で答えよ。

1 残念である

2 期待はずれである

3 思うようにならない

4 本心ではない

5 事実ではありえない

(G) ——— 線部(6)の説明として、左記各項のうち、ふさわしいものを1、ふさわしくないものを2として、それぞれ番号で答えよ。

イ 生活を好むように猫も好む。

ロ 私の生活自体が猫というものを好む。

ハ 私の日常生活には猫が不可欠である。

ニ 絵かきとしての生活に猫は好ましい。

ホ 私が猫を好きなのは、生活が猫にむいているからである。

(H) ——— 線部(7)の説明として、左記各項のうち、ふさわしいものを1、ふさわしくないものを2として、それぞれ番号で答えよ。

イ ビイは、結局私の「自分の猫」にはなれなかった。

ロ ビイとの暮らしにも記憶や背景は付着した。

ハ 牡猫は牝猫とはだいぶ違うのが原因だった。

ニ 私がすでに大人になっていたのも一因だった。

ホ エゴイストの彼との別れはさほど辛いものではなかった。

二 左の文章を読んで後の設問に答えよ。(解答はすべて解答用紙に書くこと)

日本の近代都市計画の草分けとして知られる石川栄耀先生(一八九三—一九五五)は、中学生の社会科学教科書『都市』のなかで、名都について語っている。私流にかいつまんで解釈すると、その第一条件は山水美、第二条件は文化計画。これは、官庁、美術館、博物館、劇場などの公共建築をなるべくまとめ、印象深く配置すること。そして友愛計画とでも称すべき第三は、故郷の偉人の銅像を街角にたてたり、故事古跡を保存したり、盛り場や商店街などの楽しい賑わいの演出など、つまり人間の善意の表現としての社交精神の重要性だ。

先生の名都論の見所は、都市の景観性を力説するところにある。そこが大事なところだ。東京の戦災復興を陣頭指揮なさった石川先生は、交通や防災の重要性を百も承知のうえで、この三条件に照明をあてたのだ。

この三条件は美しい山河を背景にして、市民がわが故郷を賛美している誇り高い構図を示したものである。あるいはまた、その土地の魂の見え隠れする様子が芝居のように演出された都市、それこそ石川先生にとって名都ではなかつたらうか。東京を例にとれば、緑深い上野の山だ。美術館、博物館、動物園、美術学校など文化の香り高い丘の辺に不忍池しのばずが水をたたえ、その岸辺に楽しい盛り場がひろがる。そして山紫水明の京都、その由緒ある山裾や川辺の宴席で交歓をたのしむ市民の姿は名都にふさわしいのではないであらうか。

安全な環境や、効率のよい交通などは都市計画にとってあたりまえのことで、魂の見えない都市は名都ではない。「仏つくつて魂入れず」では困る、先生はこう主張なさったのだと思われてならない。風景計画とは、都市に魂をいれ、それがよく見えるように演出することだ。優れた都市の名場面へ身をおくと、その場所に棲む何者かにじっと見つめられているような気がしてならない。

近代都市計画は産業革命の結果として生じたさまざまなアクヘイ、たとえば、過密、非衛生、交通混雑などの都市病理にメスをいれ、これを癒すことに専念してきた。このような都市病理観に立って、個別の病を癒すことはもとより不可欠なことではあるが、誇らしい佇まいや歴史的な記憶といった品格に欠けた町は、⁽¹⁾はたして健康

な都市といえるであろうか。「仏つくつて魂入れず」では情けない。人間がそうであるように、都市もまた、その豊かな感性や品格を切り捨て、病理だけをみて健康かどうか判断するわけにいかないだろう。健康な都市は、病気が無いだけでなく、かならずきらりと輝く個性的なまなざしを投げかけてくる。それが都市の魂だ。

都市に魂を入れるといえば、むずかしく響くかも知れないが、要するに人を魅了する力を持つように、都市の理想を高く掲げるといふことである。昭和二、三十年代には、都市の理想を語る声は健やかだった。この戦災復興期の都市計画では、まだ戦前の都市の理想が息づいていたからである。そこから、あの仙台の青葉通りや広島の平和大通りのような街路の名作が産まれたのだ。天下の名城へまっしぐらに向かう姫路駅前通りなども……。そこには、原宿の表参道を産み落とした大正デモクラシーの残り香を感じ取れないであろうか。東京都の建設局長として戦災復興を指導し、名都を作るには法定都市計画を超えた「法外都市計画」に頼るしかない、と考えた石川先生は、正当にしてしかも異端の詩人計画者として、理想主義の最後の光芒こうぼうを放ったのであった（中島直人他『都市計画家 石川栄耀』）。

都市の理想主義は今ややせ細ってしまった。都市の専門家においてすら……。技術的な断片にこだわって、理想というものに対して冷淡で懐疑的な態度をとることが、専門家の証であるようになってしまった。一般の市民が理想に背をむけてしまうのも無理はない。

なぜ、理想が失せたのか？ 古い計画思想にとつてかわった近代的な機能主義の冷たい理念が、市井に暮らす人々の体温になじまなかつたばかりか、モンスター化した情報都市のなかで、人々の価値観が **a** 分

b 裂してしまった結果、生きた都市の全体像が見えにくくなったのだ。都市は機械装置のようでありながらも一種の生き物であり、その健全な生態をつかむためには、手足や器官を精査するだけではなく、また部分の動きを見るだけでも足りない。全体の姿と部分の景色が交信しながら、自ずと発する精気を眺め感じる常識が大事なのだ。ところが、都市学の発達は、このような全人格的な、あるいは生命論的な視線を忘れて、タコツボ的な専門主義に陥り、行政もまた堅い縦割りの迷路に迷い込んでしまった。

それ以上に言い募れば愚痴めいてくるが、端的にいえば、それだけ世間がせちがらくなって、理想談義の余裕をなくしたのだろう。

ともかく理想を語る言葉はか細くなった。確かに、現実⁽¹⁾に眼をつぶった理想主義ほど危ういものはないだろうが、しかしまた、理想をもたない行動は、あたかも灯火を掲げずに闇夜を行くように、人を迷わせ、虚無の淵へ陥れる。

⁽²⁾今日の都市の混迷はその報いにちがいない。

結局、私たちは、理想と現実のあいだにピンと張りつめたロープの上で、カルワザを演ずるような緊張を強いられるのだが、考えてみればいつの時代でも人間はそのようにして生きてきたのだ。時代が許さぬからと言って、こらえ性もなくあつさり理想を投げすてるのは、人間の歴史に対する背信であるように思える。

そうは言っても、現代においては、都市の理想が容易に語りにくくなってしまったことも事実だ。理想の喪失にはそれなりの理由がある。

それを百も承知のうえで、なお理想を語ろう。そのために、都市の理想を放棄した現代の懐疑論者たちがいかに疑おうとこれだけは疑いえない事実を見つけ、そこから再出発しようと思う。

まず第一は自分の身体。

視覚、聴覚、触覚……人間は身体⁽³⁾の感覚によって、環境を知覚する。こうして、五感によって身体にすりこまれた環境は、写真のフィルムに写った映像とは異なり、感情が重なっているから、写真と感動が分かち難くむすびついた絵画や詩のように豊かなものだ。

身体という環境との通信装置によって、私たちは、絶え間なく環境の意味を解釈し、その面影を想い描くこと⁽³⁾によって、新しい価値を生産しているともいえる。そのような創造的な身体を、風景が立ち現れる原点として選び取ることに、誰も異存はないだろう。

この身体⁽³⁾の感覚をつぶさに反省してみよう。地に足をつけている私たちの身体は、大地から生え上がってきて、

その先端の指先や鼻先などが、視野に食い込んでいるから、そのとき風景として立ち現われる環境体験は身体的感覚を媒介して大地に根を下ろしている。したがって場所は、たしかに「基体的な身体の拡張」(中村雄二郎「場所」)に違いない。

そこで第二に、その身体が根をおろし、あるいは生え上がってくる大地を拳げなければならない。これは身体が交信する環境の基盤である。山から水が流れ出し、木が茂り、家がうずくまる大地のひろがり。宙に浮いて暮らすわけにいかない人間は、有情の大地から精気を吸い上げ、それによって生かされているという生命感覚、あるいは生の意味を感じ取るのだ。それにつけても思い出されるのは、数週間ぶりに宇宙ステーションから地上へ舞い戻ったスペースシャトルのハッチが開いて、やわらかな光に包まれた草いきれが、風に乗ってわっと船内へ押し寄せたときの感動を、若田光一飛行士が語っていたことだ。それは狂おしいほどの生命感覚にあふれた大地の匂いである。

このように、五感の受信した感覚によって大地へ投錨した身体は、もはや大地という場所とひとつにつながった何ものである。そして、このひとつにつながった身体と大地は、それぞれが記憶をもっている。身体は、個人の記憶と社会の記憶を埋め込まれているし、大地もまた、山や谷や川やあるいは森や村や町に、繰り広げられた無数の個人の生きた証や社会のドラマ、すなわちその場所ならではの歴史を刻まれている。それはまさにその場所で生きた生身の人間がそこで生き、つくり、見た証だから、先人の身体の痕跡がしるされ、視線が踊り、発した声が聞こえるといつてもいい。土地の霊(ゲニウス・ロキ)とよばれるこれらの徴しは、目前の風景ばかりか地名や文学などの言葉に転写され、生き続けている。

つまり、土地に固有の山や水や町を横系にし、歴史を縦系にした精巧な織物、哲学者がギリシャ語でトポス(場所)と呼ぶ風景の母胎がここにあらわれる。場所は、人を包み込んでくる有情の大地として、身体と不可分な縁を結んでいる。⁽⁴⁾トポスと身体を繋ぐものが風景ではないか。

(中村良夫『都市をつくる風景』による)

問

(A) 線部(イ)・(ロ)を漢字に改めよ。(ただし、楷書^{かいしよ}で記すこと)

(B) 線部(1)について。この説明として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

- 1 劇場や商店街が配置され活気にあふれた都市
- 2 交通機関が整備された機能的な人にやさしい都市
- 3 高い理想のもとに人々を引きつける都市
- 4 衛生状態に配慮された暮らしやすい都市
- 5 古い伝統と新しい文化が共存できる都市

(C) 空欄 a . b にはどのような字を補ったらよいか。それぞれ漢字一字で記せ。

(D) 線部(2)について。「今日の都市の混迷」の理由として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

- 1 機能主義がはびこって、都市全体の姿を眺めることができなくなったため。
- 2 産業革命により生じた、過密、非衛生、交通混雑を野放しにしてきたため。
- 3 都市の景観性よりも、都市の安全性や効率のよい交通を重視してきたため。
- 4 短期的な対応に終始し、長期的な展望に立って計画できなくなったため。
- 5 情報化社会の到来により、人々の理想がばらばらになってしまったため。

(E) 線部(3)について。筆者の考える「創造的な身体」とはどのような身体か。句読点とも二十字以内で記せ。

(F) 線部(4)について。このように筆者が考える理由として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

- 1 大地から吸い上げた精気を身体が取り込むことで、風景を感じ取ることができるから。

- 2 身体に埋め込まれた記憶と、土地に刻まれた歴史が一つになって風景となるから。
 - 3 歴史や文化の創造を担ってきた風景には、先人の魂が生き続けているから。
 - 4 山水美をともしなう風景には、長い時間をかけて郷土愛を伝える力があるから。
 - 5 市民を魅了する風景には、人を包み込むエネルギーが満ちあふれているから。
- (G) 左記各項のうち、本文の内容と合致するものを1、合致しないものを2として、それぞれ番号で答えよ。
- イ 石川栄耀の名都論では、防災の重要性をもとに、山水美および文化と友愛計画を主張している。
 - ロ 戦災復興の都市計画では、都市病理への対応に追われ、高い理想を掲げることができなかった。
 - ハ 現実に目をつぶった理想主義は危ういが、理想を掲げない行動よりは信頼できる。
 - ニ 宇宙ステーションでは、生命感覚にあふれた風景を感じ取ることができない。

三 左の文章を読んで後の設問に答えよ。(解答はすべて解答用紙に書くこと)

紫の上、いたうわづらひたまひし御心地の後、いとあつしくなりたまひて、そこはかとなく悩みわたりたまふこと久しくなりぬ。いとおどろおどろしうはあらねど、年月かさなれば、頼もしげなく、いとどあえかになりまさりたまへるを、院の思ほし嘆くこと限りなし。しばしにても後れきこえたまはむことをば、いみじかるべく思し、みづからの御心地には、この世に飽かぬことなく、うしろめたき絆だにまじらぬ御身なれば、あながちにかけとどめまほしき御命とも思されぬを、年ごろの御契りかけ離れ、思ひ嘆かせたてまつらむことのみぞ、人知れぬ御心の中にもものあはれに思されける。「後の世のために」と、尊きことどもを多くせさせたまひつつ、「いかでなほ本意あるさまになりて、しばしもかかづらはむ命のほどは行ひを紛れなく」と、たゆみなく思しのたまへど、さらにゆるしきこえたまはず。さるは、わが御心にも、しか思しそめたる筋なれば、かくねむごろに思ひたまへるついでにもよほされて、「同じ道にも入りなむ」と思せど、一たび家を出でたまひなば、「仮にもこの世をかへりみむ」とは思しおきてず。後の世には、「同じ蓮の座をも分けむ」と契りかはしきこえたまひて、頼みをかけたまふ御仲なれど、ここながら勤めたまはむほどは、同じ山なりとも、峰を隔ててあひ見たてまつらぬ住み処にかけ離れなむことをのみ思しまうけたるに、かくいと頼もしげなきさまに悩みあついたまへば、いと心苦しき御ありさまを「今は」とゆき離れむきぎみには捨てがたく、なかなか山水の住み処濁りぬべく、思しとどこほるほどに、ただうちあさへたる思ひのままの道心おこす人々には、こよなう後れたまひぬべかめり。御ゆるしなきて、心ひとつに思し立たむも、さまあしく本意なきやうなれば、このことによりてぞ、女君は恨めしく思ひきこえたまひける。わが御身をも、「罪軽かるまじきにや」とうしろめたく思されけり。

〔源氏物語〕御法による

(注) 1 紫の上——光源氏の妻。大病をして以来、健康が思わしくない。

(E) ——— 線部(5)の現代語訳を五字以内で記せ。

(F) ——— 線部(6)について。どのようなことを「ものあはれ」に思っているのか、左記各項の中から最も適当なもの一つを選び、番号で答えよ。

- 1 移ろいやすい世の中
- 2 延命の願い
- 3 争いが絶えない人の世
- 4 はかない人の命
- 5 夫婦の別れ

(G) ——— 線部(7)の「しか」とはどのようなことを指しているか。その内容を最もよく表している言葉を、本文中から抜き出し、五字以内で記せ。ただし、句読点は含まない。

(H) ——— 線部(8)の現代語訳として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

- 1 言い聞かされて
- 2 うながされて
- 3 敬い慕われて
- 4 くわだてられて
- 5 付き従わされて

(I) ——— 線部(9)の現代語訳として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

- 1 いかにも
- 2 かえつて
- 3 必ずしも
- 4 かなり
- 5 ますます

(J) ——— 線部(10)の「このこと」とはどのようなことを指しているか。その内容を最もよく表している言葉を、本文中から抜き出し、七字以内で記せ。ただし、句読点は含まない。

(K) ——— 線部(a)と(c)はそれぞれ誰を指すか。左記各項の中から最も適当なもの一つずつ選び、番号で答えよ。ただし、同じ番号を二度以上用いてもよい。

- 1 院(光源氏)
- 2 紫の上

(L) ——— 線部(i)と(ii)はそれぞれ誰に対する敬意か。左記各項の中から最も適当なものを一つずつ選び、番号で答えよ。ただし、同じ番号を二度以上用いてもよい。

- 1 院(光源氏)
- 2 紫の上
- 3 院(光源氏)と紫の上

(M) ——— 線部の文法上の意味は何か。左記各項の中から最も適当なもの一つを選び、番号で答えよ。

- 1 詠嘆
- 2 疑問
- 3 反語